

大阪短歌チョップ2 2017年2月25日

トークセッション：「あつまる、ひろがる～短歌の「場」の現場から～」

司会 | 光森裕樹 | パネリスト：荻原裕幸、田中ましろ、石井僚一

【光森】

こんにちは。トークセッションの司会を務めさせていただきます光森裕樹と申します。よろしく願いいたします。司会を土岐友浩さんが担当する予定だったのですが、どうしても外せない予定ができてしまいましたので、光森の方で担当させていただきます。このトークセッションは今から2時間くらいの長丁場になります。タイトルは「あつまる、ひろがる 短歌の「場」の現場から」ということで、荻原裕幸さんと田中ましろさん、そして石井僚一さんにお越しいただきました。色々な話が出てくると思いますが、少しでもみなさまの中で持って行ってもらうものがあればうれしいなと思います。

まず「場」という言葉ですが、荻原さんも関わっておられました、1999年編纂の岩波現代短歌辞典（岩波書店）の中で、書かれているんですね。それくらい短歌において「場」というのはよく語られることなのですが、かいつまんで説明します。「場」という用語の説明は加藤治郎さんがお書きになっています。

ば【場】

短歌の解釈や鑑賞の前提となり読み方に方向性を与えるもの。三一音の短い詩型を自立させる基盤である。岡井隆『現代短歌入門』によって詳細に理論化された。作者名・性別・年齢・職業・所属結社といった作者に関する情報、連作の表題や詞書き・前後の作品からの影響は、場を形成する基礎的な要素である。また、歴史的事象や社会背景も作品の場となる。中でも重要なのは、歌人や流派の作歌理念である。たとえば写実を標榜する結社においては、詠まれた内容は作者の実体験に忠実なものという前提で鑑賞されてきた。しかし前衛短歌以降そういう約束事は絶対的なものではなくなっている。場は、時代の思潮につれ変化し、変革し得るものである（加藤治郎）

『岩波現代短歌辞典』（1999年 岩波書店）より

ここに書かれている「場」は、どちらか言えば、短歌が一首として読まれなくて、並んだ時にお互いに作用したりだとか、歌集で読まれる時、あるいは作者名が付いた時や新人賞の場において、色々な読まれ方がされ得たりするだとかという意味で、用いられています。少し言葉を変えるとすれば、磁場だとか重力場だとかの言葉の方が分かりやすいかもしれないです。短歌が色々な影響を受けて読まれるということですね。

ただ、今日来られた方が「場」と聞いた時には、たとえばこういった短歌チョップの集まりだとか、文学フリマや同人誌だとか、どちらかと言えばメディアに近いような印象を持

たれると思います。短歌の「場」という言葉はそれだけ幅広い意味を持っています。もちろん新しいメディアには、新しい読まれ方、新しい磁場が発生しますので、セットとなっていますが、話の内容として「場」という言葉がメディアを意味しているのか、あるいは一首だけじゃなくて色々なものから影響を受けて読み方がそこから変わったり、新しい読み方が生まれたりする、という意味での「場」なのか、ということをご判断いただきながら聞いていただきたいと思います。

私から、御三方を簡単に紹介させていただきまして、それぞれの方に、関わってこられた「場」だとか、これからの「場」についてどう思っているか、をお聞きしたいと思います。まずは荻原裕幸さんです。まず荻原さんは1962年（昭和37年）生まれです。1987年に「青年霊歌」30首で第30回の短歌研究新人賞を受賞されています。その翌年には第一歌集を出されました。それから第四歌集まで立て続けに出されて、少し間が空いて2001年には第五歌集を含む全歌集『デジタル・ビスケット』を刊行されています。荻原裕幸さんについての「場」を考えた時に三つ、私が思い浮かべるものがあります。最初に思いつくのはインターネットです。少し前のインターネットでの短歌関係のサイトや企画、そういったものには必ず荻原さんが関わっておられた印象です。たとえば「[電腦短歌のイエローページ](#)」、これはリンク集です。それから「[電腦短歌のBBS](#)」。掲示板という言葉自体が今では懐かしくなりましたが、藤原隆一郎さん、穂村弘さんの掲示板と言われるようなサイト、そういったものの起ち上げを行っておられたのが荻原さんです。

二つ目は、歌葉新人賞です。2002年には加藤治郎さんと穂村弘さん、荻原裕幸さんの3名が選考委員となられて歌葉新人賞を創設されました。掲示板でリアルタイムに実際に選考したり、こういった公開の場においてリアルタイムで選考したりと、かなり変わった賞ではありましたが、今から振り返ると齊藤斎藤さんだとか笹井宏之さんだとか、多くの方がデビューして、とても短歌史的に大きな賞だったと思います。

三点目が短歌雑誌「[短歌ヴァーサス](#)」です。歌葉新人賞と時期をほぼ同じにしますが、2003年に荻原裕幸さんが責任編集で創刊されて、以後2007年までに11号が出ました。柘野浩一さんから始まって、色々な方を表紙にしながらかつ11号まで続きました。

続いて田中ましろさんです。田中ましろさんは1980年（昭和55年）生まれです。

ましろさんと聞いて思いつくのも三つありまして、一つ目がやはり「うたらば」です。「うたらば」は2010年に「私財を投げうって」というコピーとともに登場した短歌と写真のフリーペーパーです。2010年に創刊準備号的な0号が出て、以後ナンバリングタイトルとして17号まで出ていて、今でも続いています。

二つ目が『[かたすみさがし](#)』（書肆侃侃房・新鋭短歌シリーズ）という2013年に第一歌集として出された歌集です。QRコードが付いていたり、パスワードを入力することによ

って、田中さんの短歌と色々な音楽なり動画なりとコラボレーションされたものが見られたり、というのがすごく新しいと思います。人や短歌が集まる場というよりも、映像や音楽と組み合わせた時にどういったふうに短歌が読まれるのか、ということに果敢に挑戦されている印象があります。

三点目は「短歌男子」です。これも2013年ですが、男性歌人のグラビアを集めた同人誌です。当時、大丈夫なのかという不安とともに見ていましたが、かなり大好評で何回か増刷もかかっています。「短歌男子」に関わらず、最近では「歌人のふんどし」というようなものもあります。短歌を集めて一冊の形にして、それが試みとして非常に新しく、本の見た目としても美しい、というのが田中ましろさんが作ってこられた「場」なのかなと思います。

最後に石井僚一さんです。石井さんは1989年生まれですから、平成生まれの歌人です。石井さんと聞いて思いつくものを三つ挙げますと、やはり最初は短歌研究新人賞の受賞と同時に起こった「虚構論争」です。2014年の第57回短歌研究新人賞を受賞した「父親のような雨に打たれて」という30首が、歌の中ではどうにもお父様が亡くなっているように見える。しかしながら実際にはお父様が生きておられた、ということで、そういった虚構自体は問題ないのですが、その事実が北海道を中心とした地方紙には載ったけれども、その他のところでは知らない人も多かった。それはいいのか、ということで加藤治郎さんが虚構の議論について話し合う必要性があるのでは、ということをおっしゃいました。新人賞という場は名前や性別は取っ払って読まれるのが前提なので、そのような場において虚構の作品を出すというのがどういうことなのかと、色々と議論が起こったのが、「場」に関わる印象深いことかなと思います。

二つ目と三つ目は、「石井僚一短歌賞」および「毎月歌壇」です。「石井僚一短歌賞」はご自身でも短歌賞をやってみたいということで、創設されました。第一回がすでに募集されて結果も発表されています。同時に「毎月歌壇」という、谷川電話さんと一緒に月ごとに歌を集めて選をしてコメントをつけて、それをネットプリントというかたちで発表する、ということを試みられています。二つ目も三つめもかなり変わった「場」で、こちらも最初は大丈夫かなと思いながら見ていました。今日来られている3名の方は、その時その場で短歌の世界の中で「大丈夫かな」と思われてきたことに、チャレンジされてきた方だと思います。

チャレンジという点で共通点がありますが、御三方の関係性ということに触れておきますと、田中ましろさんの年齢に2年を足すと、荻原さんが第五歌集まで出していた年齢になります。だから田中さんはあと2年でだいぶ頑張らないといけないですね。それからさらに2年足すと、歌葉新人賞を始めていたので、田中さんがあと4年後にどうなっているかが楽しみです。それから石井僚一さんと荻原さんは、実は短歌研究新人賞を受賞した年齢

は同じです。そこから二年経って、その頃には荻原さんは第一歌集を出していて、かつ朝日新聞の中日版に連載まで持っていたということです。石井僚一短歌賞はたしかに早く創りましたが。そのあたり、時代が違いつつも共通点のある三人としますので、色々話を伺いたいと思います。

では、お一人10分くらいでお考えになっていることだとか、ボールをキックしてみたいということを中心に話していただきたいと思います。

【荻原】

荻原裕幸です。よろしく申し上げます。2時間は長いですから、肩の力を抜きながらやっていきたいと思います。いきなり光森さんが若い人に変なプレッシャーをかけていましたが、時代が違えば色々違うことがいっぱいあるんじゃないですかね。「場」というのは、加藤治郎さんの辞典の記述もありましたが、難しくてよく分からないので、もう少しじっくりと話せたらと思います。

その加藤治郎さんと、さきほど紹介いただいた歌葉の新人賞も含めて色々な「場」をめぐる活動を、私はしてきました。「フォルテ」という同人誌を1987年に出したのが、彼の活動の初めでした。それもそもそも「場」という問題から始めたことだったんです。加藤さんが86年に短歌研究の新人賞を取って、私はその翌年にいただきました。分かっただけですが、総合誌で新人賞を貰ったからといって、翌月と翌々月くらいは作品に関する原稿依頼があっても、それ以降顔を出す場が生じることがほとんど無かったんですね。それも事前に知っているんで、加藤さんに「20首とか30首ぐらいの長さの作品でも、そういう場が短歌総合誌に無いんだったら、自分たちで同人誌を作りましょうか。」というニュアンスで持ちかけました。大塚寅彦さん、西田政史さん、水原紫苑さん、辰巳泰子さん、あたりが同人で、そのような同人誌を起ち上げました。多少参考になるかもしれないので数字を言っておきますと、全部で500部刷りました。今では多いのか少ないのかは分かりませんが、その時の同人誌としては異常な量でした。で、全部は売り切れませんでした。今も家のどこかに在庫が眠っています。もちろん寄贈もしています。そのうち百数十部くらい、抑えるべき人を研究して、その人たちに送って、そうやって宣伝すれば少しは機能するかと思ひまして。そういう展開をしたんですが、同人誌としては予想していた良い感じで色々な人に読んでいただけました。

ところが、その後、続けていくうちに予想外のことが起きました。我々は、総合誌は新人賞を取っても場所を提供しないことが前提にあったんですが、総合誌が場所を提供しはじめちゃったんですね。それが80年代の後半くらいで、たぶん『サラダ記念日』のことがあったのが大きな理由だと思います。同人誌の一番の大本になっていた動機がぐらぐらに揺らぐわけです。総合誌から原稿依頼が来て、同人誌の作品を書くのが大変、というような本末転倒な状況が出てきました。本来は何らかのかたちの場所が欲しくて起ち上げた

ものが、実際に場所ができてしまってすごく妙な印象を持ちました。当初望んでいたことが一番良いかたちで実現したわけですから、結果としては嬉しいことだったんですが、何だろうこれは、という疑問を抱えたまま、その他の事情もあって、二桁いかないうちにその同人誌は終了しました。短歌における「場」の問題について、加藤さんと色々な展開をしていったことを考える時には象徴的な出来事だったなあ、とさきほどあらためて思い出しました。

というのは、「歌葉新人賞」や「短歌ヴァーサス」もそういうところがあるからです。つまり歌壇には自分たちが面白いと思う人、あるいはそれまで見たこともないようなタイプの人が入る余地が、「場」の隙間がなかったという時期があって、ネットを絡めたり、私自身が責任編集の雑誌を絡めたりしながら、歌壇とは直結しなくても昔に同人誌を作ったような感覚で、その「場」を自分たちで作ればいいじゃないかのところが少しはあったわけです。純粹に個人的な価値観ですが、面白いと思う人を見つけだしてお願いして書いてもらって、あるいは新人賞の場合は公募ですから、いい人来ないかなと目を光らせていたらとんでもない人たちがいっぱい現れてきて、その人たちに何らかのかたちで光を当てられたら、ということをやりました。するとこれも、たとえば斉藤斎藤さんが一番象徴的でしょうね。歌葉新人賞は歌壇メディア的にはとてもマイナーだったと思いますが、短歌の世界でものすごく話題になり、短歌の世界さえ飛び出して一般のバラエティ番組でも話題になるような、そんな状態になりました。

最初からそういうことはもちろん予測していませんが、ある程度は望んでいた方に物事が動いていくんです。「場」を作ったり、必要だと考えて動きはじめたりすると、雪崩が起きるようにすうーっと物事が動いていってしまって、自分たちがそこに居座って何かしようとする力がうまくかからなくなってしまうことがあります。短歌をめぐる「場」はその繰り返しかな、と強く感じた次第です。

たぶん今日のイベントも、おそらく、既存の短歌の世界、歌壇というようなところを中心とした短歌の世界に、あってほしいけれども存在しない「場」として、企画されていると思います。けれど、もしかすると数年後かあるいは五年後、十年後かもしれないですが、角川書店か短歌研究か、そういったところが主催の短歌チョップのようなイベントが起きて、牛さんはまた新しいことを考えないといけなくなるのかな、ということを思ったりしています。

【光森】

荻原さん、ありがとうございます。簡単にまとめると、既存の歌壇にないからこそ始めたことが、後から振り返るとどんどん歌壇が取り込んでいっている、と。それは歌壇が貪欲なのか、あるいは自分たちの望み通りだったのか、ということは色々解釈できますが、私たちが新しいことをするということが、何らかのかたちで短歌の世界にきちんと還元されていた、という希望的な見方をしてもいいのかな、という話だと思います。

【田中】

田中ましろです。今日は来てくださってありがとうございます。僕の方は「うたらば」の話を中心にしつつ、最後に他の企画の話にも触れようと思います。

「うたらば」をご存知ない方のためにもう一度簡単に説明しますが、フリーペーパーです。全国の北海道から鹿児島までのカフェなどに置かせていただいています。最近では年会費をいただいて、郵送で自宅に届ける、という有料サービスもしています。最初は「私財を投げ打って」と言って始めてみたんですが、長く続けるのにそれではあかんやろと方々から言われまして（笑）、お金にすることも考えないと、ということで有料サービスを始めました。

制作の手順ですが、まずネット上でお題を出して短歌を募集します。僕が選んだ作品に、自分で写真を撮って、パソコンで編集して本が出来上がります。それを全国に配って置いてもらう、というのが毎回の一連作業で、4カ月に1回刊行しています。

歩みを見てみますと、一番最初が86首です。86首からはじまったものが最新号では535首の投稿数です。最高では677首でした。発行部数も最初は手作りで150部を作っていましたが、600部を超えたくらいから、一人で作るのが限界になってきたので、印刷業者に出すようになりました。今は1200部です。この1200部はこの場でも配るということで、いつもより多いですが、全国には1000部くらいは配布してもらっています。投稿者数もこの7年間で47名から153名に増えました。だいぶ知名度は上がってきたかな、と思っています。

次が、ブログパーツ短歌です。「うたらば」を始める時の宣伝用として始めました。ブログパーツという言葉自体が最近では耳慣れなくなっていますが、色々な方のブログに、投稿された歌が流れるという仕組みです。それをを用いて3週間に1回のペースで、僕が選をして世の中に出しています。ブログパーツは短歌を順番に10秒ずつ見せていくという仕組みなので、その10秒間で意味が分からないと短歌として読者に届かないと思ったので、「10秒で分かる短歌」であることを重視しています。たとえば、「神様は神様なりのユーモアで「ひ・み・つ」の上には「は・ま・ち」がいます」（西村湯呑）。この短歌は「魚」がテーマの時ですが、このような面白系の歌も集めています。100回以上続けていますが、最初にブログパーツを貼ってもらっていた9ブログから、97ブログになりました。投稿数も最初の55首から最新で787首。MAXの時は1488首集まりました。選は大変ですがやりがいのある作業だと思っています。実はすごくいい歌なのに、僕が選ばなかったがために世に出ない、というのがすごくプレッシャーで、投稿歌は入念に何回も見るようにしています。

次は「うたらば」のポジションについて。どういうところにいる人たちに届けたいのか、ということですが、そもそもは短歌を知らない人、つまりカフェなどに来ている普通のお客様さんに向けて、短歌ってものがあるよ、ということをもまず分かってもらう短歌の世界の

入り口の一つになれないかな、というコンセプトで始めました。ただ、そこに届けるための短歌を作ってくれるのは、「短歌を詠む人」や「結社」といった方々でないと、外側に出すためのいい歌はなかなか作っていただけないので、うたらばのターゲットとしては満遍なく、結社の人、ネットで短歌を詠んでいる人、読者の人、短歌をまったく知らない人と、幅広く見て戦略を立てています。そのために短歌の選も、短歌を知らない人も読むということを意識しています。どういうものを選んでいいのか、分かりやすいように分類しましたので、ひとつずつ見ていこうと思います。

「うたらば」の短歌の特徴に「共通認識をフックにして読者を納得させる」というものがあります。「ああ人は諭吉の下に一葉をつくり英世をその下とした」（工藤吉生）これはお金の話ですね。人類平等と言っているくせにめっちゃ金銭的に差をつけているやんと指摘している歌です。たとえばもう一つ「非常口マークの奴も時々は逃げたくないと思うんだろう」（葛山葛粉）という。なんかちょっと納得させられますね。非常口マークという共通認識のところからちょっと違った切り口で歌を作っている、という考えで選びました。

次の特徴です。「読者の脳内に想起させるイメージが魅力的」一枚絵として頭にふっと浮かぶイメージがすごく美しいということです。「縦書きの国に生まれて雨降りは物語だと存じています」（飯田和馬）この歌は、ツイッター上のうたらばの短歌 bot でもすごくリツイートされたことがありまして、文字だけでも20万人くらいには届きました。「うつくしき他者の介在なだらかな腹に手を添へ微睡む姉は」（飯田彩乃）これもイメージとして美しい、という考えで採用している歌です。

次の特徴です。「切り取られた31文字の前後にある物語を考えさせる力がある」行間がたっぷり含まれていると言うんですかね。「黙らせるために渡した飴なのに「おいしいね」って君は笑った」（赤井悠利）どんな関係なんだろう。女の子のちょっと白けてる感じがいい、と捉えました。「あかるいね、性格」「まあね（本当は自分をちぎって燃してるだけ）」（柴田葵）これも内面を書いて、この二人の関係性を匂わせている短歌ですね。

次の特徴は「作中主体がどうしようもないほど人間らしくて好感が持てる」です。人間やな一、という感じの歌が僕はすごく好きです。「友人を慰めつつも焦げてゆくカルビばかりを目で追っていた」（山本左足）友人の話がつまらないんでしょうね。友だちだからうんうん言ってるけど、横目でずーっとカルビを見ている、というシチュエーションのリアルな感じ。そういうことってあるよね、という感覚はすごく響きやすいと思っています。「距離を置く作戦実行中ですが月がきれいで話がしたい」（千原こはぎ）これも恋愛における可愛さが出ています。もうだめなのか、という恋愛の惚れちゃっている感じのニュアンスがよく伝わってくる、という短歌です。

単純に「面白い。」というのも特徴です。人間の場合は作中主体の性格がいいというのがありますが、ものとかが面白いのも結構あります。「室伏が浜辺で投げたハンマーをくわえて戻る室伏の犬」（関根裕治）着目点がすごいなと思ったんですよね。人偏の横に犬が付いていて、あの人偏がきっと室伏さんなんでしょうね。ばあーってハンマーを投げたら室伏

の「伏」から犬が走って離れていくイメージが面白いし、引き込まれました。「笑える」ってすごいと思うので、面白い歌も結構選んでいます。

ここまでの歌はブログパーツの歌ですので、10秒で分かる、という基準で選んでいます。フリーペーパーの方はもうちょっと世界観重視です。全体の世界観で、まったく短歌を知らない人を引き込みたいと思っています。「花瓶 その花の終わりにふさわしくまたうつくしいお墓でしたね」(木下龍也) こういう短歌にイメージとしての写真と、僕の言葉を添えています。ビジュアルと短い言葉で短歌の読みをちょっと手伝ってあげる、というのがフリーペーパーの考え方です。

「似たやうなドアが並んでゐる春を君は制服なんかで選ぶ」(太田宣子)「引き寄せる力と遠くなる力ひとつだけ月を持つさびしさよ」(ユキノ進)「夕焼けに機械の音は軋みつつ港湾都市の末期の光」(鈴木加成太) これらの短歌もイメージとセットにしています。短歌を知らない人まで届けなきゃいけない、という時に小難しい歌を提示してもまったく短歌を読めない人は良さがわからないわけですし、短歌を知らない人でも分かる、けれどもいい感じに思える、という微妙なラインを探り探りして作っています。

「うたれば」に関してはこれぐらいにしておきます。最近やった企画で「歌人のふんどし」の話をしようと思います。「歌人のふんどし」をご存知ない方もいらっしゃると思うので、どのような企画か話しておきます。まず参加者それぞれが連作タイトルだけを、好き勝手に考えます。その連作タイトルを参加者内でシャッフルして、自分が担当になったタイトルで連作を作らないといけないという企画です。ちょっと自分ではあり得ないタイトルで連作を作らないといけないかもしれない。ある種の「お祭り」と思っています。それを「やりたい人いますかー？」と募ったら143人集まりました。みんなお祭り好きなんですね。同人誌って人を集めて一冊の本を作る、というものですが、そこにちょっとイベント化して話題を作っていく。僕の中では「短歌を遠くに届ける」というテーマがずっとあるので、どう話題を作っていくかというところから企画を考えている部分があります。

無茶ぶりのタイトルがどうだったか、というところを見てもらおうと思います。「餃子の皮の襷ですよ」とか。「保証人になってよ。」とか。「ひかりって書いときゃなんかサマになる」は歌人殺しのタイトルですね。「ここで一句！」という短歌連作であるとか。こうすることで、受け取った人も絶対自分では考えないジャンルで短歌を考えるので、作る側も自分の中で新しい発見があるんじゃないか、という。実験的ではあったんですが、みんな楽しんでやっていただけましたし、ツイッター上ではそこそこ話題になれたかな、という企画でした。

僕の「場」のテーマは、あくまでも遠くに届けるとか広く読んでもらうということなんですね。その方向で考えた時には、「場」の責任、届けていくために何をどうしていくのかという責任があるんじゃないかと思います。なので、何かを考える時には、いつもそこから始めています。

【光森】

田中さん、ありがとうございます。荻原さんと同じように、新しい「場」、新しいメディア、というものを作ってこられたことがよく分かりました。違いとして気づいたのは数字の面ですね。「フォルテ」がだいたい500部くらい刷ったことに対して、「うたらば」は色々な場に配るということを前提に1200部刷っている、というところ。その時の対象として、喫茶店だとか、こういったイベントだとか、結社を中心と捉えた時にそこから遠いところまで届くように、というところをかなり意識されているな、と感じ取ることができました。

また、たとえば飯田彩乃さんだとか木下龍也さんだとか、今、短歌の世界ですごく活躍されている方も実際に「うたらば」によく投稿されていましたが、ただ、それを歌葉新人賞における斉藤斎藤さんや笹井宏之さんのように、デビューという言葉では言えないような感覚もあって、そこらへんがまた新しいのか、何が違うのか、というところが私が個人として面白いと思ってお聞きしました。

【石井】

はい。どうもこんにちは。石井僚一です。よろしく申し上げます。僕はこの御二方と比べると超ペーパーなんですけど、その前提で喋りたいと思います。「場」といことで、僕が普段、活動している場所の話を最初にした上で、「石井僚一短歌賞」や「毎月歌壇」の話をできればと思います。

僕が短歌をちゃんと始めたのは2014年の4月ぐらいです。その頃に北大短歌会に入って、短歌ないし歌会というものにドハマリしていった感じです。要するに、田中ましろさんが作っていた「短歌男子」が2013年、「うたらば」が2010年、の頃なので、その時代を知らないで短歌を始めたわけです。

スライドの写真は機関誌が出るのでその話し合いをしているところなんです。今のところ細々と和気藹々とみんなでやっています。学生短歌会の話をする、今ものすごく流行って色々なところに学生短歌会ができています。早稲田大学の短歌会と京大の短歌会はずっと長いことあったんですが、ここ5年ぐらいで色々な各大学に短歌会ができました。北大短歌会も今年で5年目ぐらいです。普段はその中で活動しています。

「石井は生きている歌会」という歌会を、自分自身で開いて色々なところでやっています。これは広島に行った時の写真です。この後、岡山でもやっています。

僕自身が短歌に出会ったきっかけが超結社の歌会だったんですね。結社という組織に入っていなくても誰でも参加できますよ、という歌会です。北海道に「らっこ歌会」という歌会がありまして、そこで山田航さんという方から「北大短歌会ってどう？」と言われて、北大短歌会に入った、という流れです。なので入り口は超結社の歌会になります。そういう意味も込めて、色々なところで歌会をやって、色々な人と短歌をやろう、ということです。「場」と言われると、僕の中では歌会が一番思い浮かびます。

「石井僚一短歌賞」は、2014年に短歌研究新人賞を受賞しまして、それで賞をやりたいなーと思ってやりました。ここが一番大事なところなので、強めに言っておきます。賞については『稀風社の貢献』という冊子にまとまっていて末尾に理由についてごちゃごちゃ書いていますが、一番のきっかけはとにかくやりたいと一瞬でも思っちゃったからです。これが本当にめちゃくちゃ大事で、色々な理由は後から付けているだけです。すぐ人間は諦めて何もしなかったり、あれやりたいなと思ってもできないと思ってしゅんとしちやったりするんですが、それを続けていると自分の中のテンションとか好奇心の芽とかがどんどん死んでいくんですね。なので、できるだけことはやっておこうと思って、相当やりました。それがバックグラウンドにあります。

この写真は選考委員のお一人、情田熱彦という方です。賞をやるにあたって後援してくれた稀風社という組織の関連の方、というか変な人です。この写真は寺井龍也さんです。超イケメンです。寺井さんは僕が短歌研究新人賞を取った時の同年に現代短歌評論賞を取っていて、そこでお会いしました。寺井さんの存在は賞をやるきっかけの一つです。評論の新人賞を取っているのに、なかなか活躍の場がないんじゃないか、というのも念頭にあるので、さきほどの荻原さんの話とも重なるかと思います。今でこそ時評とかも担当していて、どんどん出てきているのかなと思いますが、やっぱり受賞直後はあまり場がなかったもので、是非ともやってほしいと寺井さんをお呼びしました。この写真はケーキを食べる僕です。こんな感じで選考しました。

出てきた歌を少し紹介します。この「ひかりさす」が受賞作になります。「うすあかりあなたの頬のやわらかさにながあっても生きてゆきたい」「なにひとつまちがってない いつ答えあわせをしてもしあわせである」(ほしみゆえ) 石井僚一短歌賞は15首から20首の連作を募集するというので、これは15首の連作でした。一般的な新人賞は30首なので、15首ならではというか、30首でこのテンションだときついのかなと。15首だときれいにまとまるので、その選定によって出てきた連作かと思いますね。僕がすごく受賞に推しました。

次席は「これからはひとりで」という作品です。寺井さんが推した作品ですね。「昼と夜いれかはるときかすかなる音を聞きたり体躯の骨に」「すぐ嘘とわかる言葉を聞き流すピアスホルルの向かうの川へ」(杉本なお) 旧仮名遣いでどっしりと構えた歌、という感じですね。

次は「21歳」という情田熱彦さんがとった作品ですね。「ブリクラでファック・ユーのポーズとる低所得者の女ふたりで」「即日のエイズ検査が陰性でやったねという名の海老よこせ」(やまだわるいこ) この3つが、各人が1位に推した作品です。結果的に受賞はほしみゆえさんになりましたが、見て分かる通り三者三様でばらばらという感じです。やっぱり選者のくせのようなものが出るのかなと思います。ざっくり石井僚一短歌賞はこんな感じです。

で、僕は歌会が大好きなので歌会をやるんです。この写真は受賞記念歌会です。ほしみゆえさんが素顔で来るのは恥ずかしいと言うので、みんなで鼻眼鏡をつけて参加しましょう、

ということで。石井僚一短歌賞に応募してくれた人限定で集まって、歌会と授賞式をやりました。写真は受賞のほしみゆえさんと僕が笑っているところです。和気藹々と楽しくやっています。

次は「毎月歌壇」です。谷川電話さんと毎月インターネット上で短歌を募集して、それに評を付けて、ネットプリントでプリントとして出力できる、というものです。毎月50首くらいの投稿があって、発行部数は100ぐらいですかね。匿名で選んでいます。次の写真は「分っかんねえなどれがいいんだろう」って言っている僕です。歌の紹介に行きます。「そばにいて。バールのようなものがいまバールに変わるからいまそばに」（西村曜）評をすると長くなるので割愛しますが、そばにいてという熱狂的な思いを説得するのにバールのようなものが今バールに変わるから、と比喩が具現化することを言うんですね。そこの切実さに惹かれて採りました。西村さんは常連で、僕と谷川さんのW選に3回くらいなっていて、採用頻度が高い方です。「うたらば」でも常連みたいです。「あほやけんいちたすいちもわからないまんまわたしはひとりでいま酔」（尼崎武）これは谷川さんが採りました。最後の「酔」は何なんだ、という歌です。谷川さんは、これは「哀しい誤字」と書いていますね。さみしくて仕方がなくて投げやりになって、あえて酔という表記にしたのかもしれない、と。感動に似た何かを覚えた、と。そういう評をしています。「イルカがとぶイルカがおちる何も言っていないのにきみが「ん？」と振り向く」（初谷むい）さきほどの歌と同じ号の恋愛の歌ですが、これがツイッターで伸びました。尼崎さんがツイートしてくださって、100ぐらいお気に入りに入れられて、すごくネット上で反応の良かった歌です。

「毎月歌壇」も、谷川電話さんがすごく面白い人なんです。でも電話さんはネットが怖いと言ってツイッターもあまりやなくて出てこないんです。なので、人の目に見えるところに電話さんを置いておかないと駄目だと思って、それで声をかけた、というのが根っこにあります。あと、やっぱり歌会がベースにあるので、石井僚一短歌賞にしても「毎月歌壇」にしても、人の短歌を読んで評をするということを少しでも開いていきたい、というのをモチベーションにしてやっています。

【光森】

石井さん、ありがとうございます。お話を聞いて、インターネットの力を借りてはいると思うんですが、基本的には歌会的な直接会うようなアナログ的なものが石井さんのベースの中にあるような気がしました。そこが、荻原さんが80年代から90年代にかけてずっと関わってこられたことや、田中さんが積極席にされていること、つまりインターネットをいかに活用するか、というのと少し違って一番面白いと思いました。その一方で石井僚一短歌賞に関しては、荻原さんが創設された歌葉新人賞の一回目よりも応募数が多かった、ということがどういう意味をもたらすのか、それからそこで受賞された方は今後何か保証されているのか、あるいは賞というものが何かを保証しないといけないのか、という

ころも私としては興味があります。

それぞれの方に色々な視点で「場」について語っていただきました。以降はノープランですので、それぞれにマイクを握りしめていただいて、関西らしく見事にボケとツッコミを披露していただこうかなと思います。まず、私から石井さんに聞きたいんですけども。今日、土岐さんが来られていなくてチャンスなので、土岐さんの話をしますが、昔、土岐さんが京大短歌賞をやりたいと京大短歌会の当時の掲示板に書いて、OBの方から止めた方がいいんじゃないかというハレーションがあったんですね。私も反対したんですよ。ただ、過去のメールを遡ってみると、京大短歌賞と名付けたのはどうも私らしくて、土岐さんに謝っていましたが……。元々は京大短歌内のメンバーだけで、連作を集める時に順位をつけたら面白いんじゃないか、それを京大短歌賞というかたちで内輪でやったらどうか、という話を土岐さんが掲示板に書いたところから、色々話が広がっちゃったので、私の責任ではないと思うんですけども、やっぱり京大短歌賞というものをやろうとした時には、私は批判があって、無くなって当然かなと思ったんですね。そこまで重たい責任は持てない。賞を取った人に対して何かをプッシュしていくこともできない。京大短歌という場がそういうものであるかということ、そうではなくて、もっと自分たちが研鑽する場じゃないのかな、という印象がありました。そうした場合に、石井僚一短歌賞、って自分の名前を付けて、動機も基本的にやりたいからというところで、もうアウト中のアウトやと思うんですよ。やる時に怒られるとかは思わなかったですか。

【石井】

全然気にしていません。やりたいからやりますよね。上の人たちのことを気にしていたら何もできないじゃないですか。後援の稀風社がアウトローな集団で、三上春海という人と鈴木ちはねという人がやっているんですが、元々二人がネットで出会ってネットで同人誌を作りはじめて、という歌壇とか一切関係ないところから出てきた人たちなんですね。三上さんはそれこそ評論の賞を取ったので、総合誌にも絡んでくる人材になっていますけど、で、三上さんが北大短歌なので、三上さんに「石井僚一短歌賞やりたいんですけど、どう？」って言うと「はい。稀風社はいいですよ。後援します。」と、それくらいのノリなので、何も考えていません。

【光森】

石井僚一短歌賞という名前にするのも特にためらいもなく？

【石井】

そうですね。名づけの個人的な裏話なんですけど、短歌賞をやろうかなと思った時に、ちょうど「なんたる星」というネットの結社が「なんたる星大賞」をやっていたんですよ。でも僕は、なんたる星が何なのかよく分からないから、なんたる星大賞と言ってもよく分か

らないだろうと思ったんですね。石井僚一短歌賞なら、石井僚一という人がいて、短歌をやっているんだな、ぐらいは分かるだろうと。そのくらいのノリです。

【光森】

平成生まれですね……。

【石井】

さっき石井僚一短歌賞に出してくれた人と話したんですが、「短歌を知らないから、石井僚一は死んだ人だと思っていました。」と言われました。そんな話もあります。

【荻原】

石井さんの今のネーミングの話は非常に面白いですね。石井僚一短歌賞と付いたら、応募された方が死んだ人だと思ったというのは、その感覚の方が正常ですよ。そのくらいの名前がきちんと残っていないと、通常は短歌賞に名前が付かないですよ。それが響きを買うという感覚を持ったまま、たとえば僕が自分の名前を付けて荻原賞を創ったとなると、僕は響きを買うと分かっていますので、敢えてやる、ということになります。そうすると本当に響きを買うんですよ。絶対にやらないですが、加藤治郎さんがやっても響きを買うはずですよ。

でも、石井さんはそれを超越しているんで、大丈夫なんだろうなと思いました。さっきスライドの途中で、ケーキを食べる写真がありましたよね。分かんねえなと悩んでいる写真とか。あれもシンポジウムでやったら響きを買うと普通だったら分かりそうなんです、みなさんも普通に見ていましたよね。だから、彼の個性なんだろうと思います。平成生まれとかそういうことじゃなくて。心に濁りがある状態でやっちゃ駄目なんですよ。澄み切った状態でやらないと。おそらくそういうことも影響しているんだろうと思います。

そもそも田中さんの話も、石井さんの話も、短歌の世界に一般的にこういうことがあって、そこから自分は何のような距離を取っています、という話がまったく無いんですよ。短観のシンポジウムに何度も出演したり、話を聞いたりしていますが、お二人くらい何の屈託もなく自分の自然なスタンスを語り続ける人を見るのが初めてで、すごく衝撃を受けています。僕はこの20年くらい結社的に無所属で活動しているので、それだけで短歌の世界、いわゆる歌壇的な歌人の集まりの中で言うと相当に珍しいスタンスです。でもお二人はまったくそのへんを意識していないし、たぶんお二人だけじゃなくて、今日いらっしやっている方たちの多くもそうですよね。かつてであれば、たとえば結社に所属するとか、歌集を刊行するとか、いわゆる短歌系の出版社が絡んでいる新人賞に応募するとか、そういったことを自分の立ち位置とかスタンスやスタイルとして、ある程度安定的に続けることを求めていると思いますが、良い意味でも悪い意味でも、その立ち位置がまったく変わっている人たちが大勢いる、というのは思います。でも、こうして話を聞いていると、

歪んでいるところは全然なくて、すごく楽しいですね。自分は歌壇の表に出る人間じゃないから、と言って結社に対してすごく敵対心を持っていたりだとか、あるいは出版物も普通の出版社から出してもいいはずなのにわざわざ敢えて近所の印刷屋さんで作ったりだとか、そういう人は見かけましたが、彼らはそうじゃない。彼らのようなスタンスでやっている人がいる、というのは僕にはとても新鮮で楽しいです。知識や情報としては、分かっていたんですが、目の前で見ると、本当にそうなんだなと思って、衝撃を受けているところ

【田中】

僕は自分ではちゃんとやっているつもりでいて、「うたらば」の活動では、選をするときに毎回、数百首、3週間に一回のペースで読む、ということなので、これは数百首単位の歌会を一人でやっているような感覚なんです。つまり読むという行為と量については担保されると思ったんですが、自分で短歌を作る機会がなくなるという懸念があったので、「かばん」に入りました。定期的に締切が来て、詠むという機会を与えないと、readばかりで make しない自分が出来上がってしまう、と。選んでいるだけの人間では仕方がない、実作者としての活動も同時並行してやらないと示しがつかない、というのはありました。

荻原さんが歌壇に隙間がないとおっしゃったところ、うんうんとすごく頷いてしまいます。歌集を出そうが、何をしようが歌壇側から、総合誌の方から原稿依頼をいただく機会は、今も変わらず隙間が無いです。石井さんもすごく頷いていますが。

それで僕はまあいいやとそこを諦めました。ただ逆に、僕の方が面白いことをしていたら、向こうから寄ってこないかな、と思ってやったのがたとえば「短歌男子」で、とにかく話題になったら、向こうから関心を持ってくれるんじゃないかと思って、作りました。実際にかなり話題になって、販売数も700部くらい売れたりだとか、新聞からも取材がきたりだとか、色々あった結果、ブームが去った後くらいに、ある出版社さんが歌人のグラビア付きのアンソロジー本を出されたんですよね。その時に「ん？これ、企画パクられたんとかどうかな？」と（笑）。ただそれは一番の名誉だと思ったんです。パクったかどうかは知らないですが、「短歌の作者が読者に見えるタイプの本」を作るということをしてくれたのは嬉しかったです。自分のしたいことが届いたのかなと。

【光森】

田中さんは、短歌男子をする目的とか目標とかはすごく計算されてたと思うんですが、でもやっぱり何か言われるかも、という気持ちはなかったですか？「うたらば」で言いますと、選の基準などについて言われたこともあったような気がしますし。

【田中】

ありました。

【光森】

「短歌男子」も私は最初、アウト！と思ったんですが、ツイッターでの評判が良かったので、まあまあ「廣野くん、格好いいな」みたいな感じでもいいんじゃないかと思いました。やっぱりギリギリのところを攻めていって、非難を受けるということを……。

【石井】

何に怯えているんですか？

【光森】

怯えているわけではないんですが、私は同人誌をするだとか、インターネットで何かをするだとかの時に、やっぱり歌壇というものを意識してやっていたと思うんですね。歌壇というものを明確に定義はできないですが、もしかしたら萩原さんがおっしゃったことに近くて、隙間がないとか、不足しているものとか、そういうことを考えながらやってきたと思います。

ただ、一方で最近の、石井さんとかの様子を見ていると、歌壇というものがあるにしても、そんな恐ろしくて怖いものではなかったような気もしているんですね。そうなってきた時に、自分自身がこれから何をやっていこうかと考えて、バックボーンというか、反抗すべき親がいないという感じにもなっています。何に怯えているのかは分からないんですが、あらためてそのへんを突き付けられたのは、田中さんとか石井さんの活動かなと思います。

【田中】

どうなんでしょうね。別に僕は歌壇を恐れているということとはまったくなくて、「短歌男子」の時も、石井さんと一緒に「おもしろいやん、やろう。」だけが動機で、歌壇から批判されるかどうかという視点はなかったです。逆に言うなら、やってみた結果、駄目なら無視されるだけだし、面白かったら食いついてくるかもしれないし、そういう意味では失うものが何もないので。10人の歌人にはスーツを着てもらって、カッコいいポーズを取ってもらって、と振り切ったくらいでやらないと思ってやっていました。

【石井】

ないないない。失うものは初めからないから。やりたいようにやるしかないです。

【萩原】

恐れる、というのではないですね。自分が一緒に活動してきた人というのが、いわゆる歌壇というエリアに非常にたくさんいるわけですね。ある面で非常に意気投合している人たちが大勢いるんだけど、その人たちの大鬣をかうということが分かっている、それでや

らないというのはあると思います。元々の人のつながりといった影響があって、特に結社に所属していて何か活動をする、それが結社の仲間や主宰にまで影響が及ぶわけです。だから時々、結社に所属しているとこれこれの活動は禁止されているんだよ、と聞いてみんながびっくりしますが、それは当然なんですね。そこの結社の先生が許可したことになるわけですから。だから、自由に活動している人たちが色々なことをやるというのが今までずっとなかったわけで、本当にそういう意味では新鮮ですね。

今だったらあまりぴんと来ないかもしれませんが、歌葉新人賞をやった時に、その選考委員が加藤治郎さんと穂村弘さんと私、というのはおそらく当時はやっぴり駄目だったことなんです。元々、そういうレーベルを作ったのは我々なので合法的に大丈夫というところはあるんですが、歌壇的にはアウトだったと思います。あと、「短歌ヴァーサス」という短歌総合誌を一歌人が責任編集することも完全にアウトなんです。相当、摩擦が起きかけました。仲良くしてくれて、どうやったら売れるの？とか相談された出版社もありましたが、すごく喧嘩腰だったところもあります。たぶんそれから10年過ぎて、動きがそのさらに向こうまで行ったんだろうと思います。

歌壇というものが、得体の知れない存在というか、悪いものではないがよいものにも見えない、というところがあります。でも、そこにいる人たちは間違いなく短歌の動きの一部分を担っているわけで、そこを完全にスルーしてしまうと見失うものもあるんじゃないかな、ということは今もずーと思いつけていることです。田中さんも石井さんも関心は持っていますよね？

【田中】

歌壇がそこから人がいなくなっていくと、短歌のジャンル自体が痩せ細るという懸念がすごくあります。短歌のうまい人たちが、歌壇側の中心部にどんどん入っていけばいいと思うんです。ネットとかを見ていると、玉石混淆な中にダイヤモンドの原石みたいな人がいたりして、そういう人が歌壇側にどんどん興味を持っていかないと、短歌全体が存続の危機までとは言いませんが、将来的に見れば誰かがそういうことを促さないといけないと思っています。

僕が歌壇に思うのは、自分たちがこういう場所だよということを周りに向かって全然アピールしない、ということなんです。結社も、最近はどうでもないですが、僕が短歌をはじめた2009年当時は本当に「結社って何？」という、秘密結社的なノリで中身が分からないものだったんですよね。それだと、やっぱり短歌をやりたいくても中に入っていけない。最近はその問題は緩和されて結社に入る人が増えてきていますが、外側の短歌をやっていない人も含めて、原石の人に少しでも興味を持ってもらって、そして、歌壇にまで興味を持っていてもらおう、という道筋としての「うたらば」のポジションを考えているつもりです。

【石井】

僕はまだ歌壇はピンときていなくて、誰がその中にいるのかもよく分からない。だから全然、入ってこない。僕は先週、今回と田中ましろさんと一緒になって、ようやく、こういうことをやられていた方なんだと改めて調べたんです。僕は2014年から短歌を始めて、その時には「うたらば」も「短歌男子」もすでにあっただもので、過去の出来事なので、何をやっているのかはよく分かっていなかったです。最近やっと、上の世代とも話すようになってきて、「夜はぶちぶちケータイ短歌」とかが流行っていたんですよね？ 現代から遡って、3年ぐらいやって、今やっと、その世代に興味が出た感じがします。

【田中】

ちなみに僕も2009年から短歌をはじめて2010年には「うたらば」を刊行していて、歌歴一年で何をやってんねん、ということになると思いつつやっていたんですが、石井さんと一緒にまあいいかというノリでしたね。

【光森】

私は高校生から短歌をやっていて、京大短歌に入るのも大学に入って五年ぐらい経ってからで、色々勉強してからじゃないと扉を叩いちゃいけない、みたいな世代だったので、田中さんや石井さんの話はやっぱりびっくりします。

ただ、田中さんがちらっとおっしゃった歌歴一年で何をやってんねんという話で、それを誰が言うのかということだと思えますよね。私は大きな存在として短歌の世界と見ていたと思いますし、その感覚が駄目だったかということそうとは思えなかったです。お聞きしたいのは、荻原さんからご覧になって、石井僚一短観賞と歌葉新人賞は目的も違いますし、賞を取った人がどうなるのか、ということも気になるんですが、どのように感じられますか？

【荻原】

歌葉の新人賞は、もちろん自分たちの純粋な価値観だけで選ぶということを大前提にやりましたが、でも、選択した後、そのものに対して個人的な、ではなくて社会的な責任が発生する、というのは思っていました。果たせたかどうかは分かりませんが、ただ単純にこの人を自分は好きですよ、ではなくてそれ以上の何か、を常に意識していましたかね。

【光森】

短歌の賞には色々あって、総合誌の色々な賞で賞金が出るんですが、私が知る限り、賞金は「副賞」なんですよね。あくまでも表彰するというのが「賞」であって、賞金は「副」です。歌葉新人賞の場合は歌集を出します、というのがプッシュだったと思います。そうだった時に、石井僚一短歌賞の場合は3万円が「賞」ですよ。

【石井】

賞です。僕のポケットマネーから3万円。

【荻原】

素晴らしいですね。

【石井】

これは最低限の礼儀と言いますか、お金を渡さないことには何か違うんじゃないかと。

【光森】

短歌賞の賞金はあくまでも「副賞」であって、荣誉だとか得られたことで約束される、あるいは入っていける道筋というものがメインの賞だったと思うんです。対して、石井さんの場合、受賞した人はこれからどうなっていくんでしょうか。社会的な責任というような、荻原さんがおっしゃったことはどうお感じですか？

【石井】

それは活躍してほしいですよ。受賞者のほしみゆえさんを誘って同人誌やりたいとか、ぼやっと考えていますけど、僕自身はまだ全然動けていません。その代わりに、稀風社でまた、新しい冊子でほしみゆえさんを取り上げてくれて、とりあえずは界限でフォローし合っていて、少しずつ押し出していっている感じです。あと、やっぱり続けていくと過去に遡って読む人も出てくるので、ちゃんと続けていきたいと思います。短歌研究新人賞の賞金が20万円で、今の石井僚一短歌賞の賞金が3万円なので、7回やると21万円で貰った分を還元できるし、最低でも7回くらいはやりたいと考えています。生きている間はずっと続けたいです。

【荻原】

石井さんのその感覚は本当にいいなと思って聞いていました。歌葉の新人賞は完全な手弁当でやっていましたが、一般的に賞の選考をする人は賞の運営側から、お金を貰っているわけなんです。名前を出しているわけだし、実際に労力を使っているわけだから当たり前です。石井さんは、自分で頑張って作って、自分で運営して、自分で選んで、その上に自分のポケットマネーを出している。すごいことだと思いますよ。だから、ものすごく真面目だなと感じました。その向こうに何か見返りがすぐに見えるような状態でやっているわけではなくて、非常にピュアな短歌に向かう気持ちでやっているなど。だから聞いていると平成生まれだな、とかそういう受け取り方をしてしまうかもしれませんが、でも本当に短歌に向かっているその姿勢は真摯だなと思います。

我々の世代という言い方は大変失礼になるので、世代という言い方はしませんが、いわゆる歌壇ということを通じて言ったり、響きを買うことがすぐに分かってしまう場所にいたりする人間は、たいていは大人の事情でばかり動いていますので、彼の言っている話は非常にいい話だと思いますね。なかなかできることじゃないと思います。

【田中】

あと、賞に応募する側の人の気持ちというものも、総合誌の賞とは若干違うものなんじゃないか、と話を聞いていて思いました。応募する側も、石井僚一短歌賞の受賞によって、その先に自分がものすごいスターになれるとまではまだ期待していない。それはいつか期待される時が来るのかもしれないけど、現段階ではまだ期待されていないので、成立している、と言えるのかもしれませんが。賞に自分の名前を付けたので、重責のような話が出てきますが。

ネットとかで短歌をしている人たちの空気感のようなものを、最近すごく感じるんですね。お祭りなんです。さっきの「歌人のふんどし」とかもそうですが、盛り上がってみんなで楽しい時間が過ごせました、というところまでのやったこと全部を楽しんでいる。そして、その先は別に気にしない、というような考え方がネットを中心とする歌人の人たちにあるんじゃないか、という雰囲気は感じます。

【石井】

我々はもう刹那的に生きているので、後のことは考えてられないんですね。でも、石井僚一短歌賞はやってよかったです。石井僚一短歌賞で初めて連作を作りました、とかそういう話を小耳に挟んだりするとやっぱり嬉しいんです。あと、賞という場で一番いいと思っているのは、自分の出した賞は仮に自分の作品が載ってなくても、受賞作とかをちょっと熱心に読むんですよ。僕も経験したことですが、やっぱり自分の出した賞の作品は、自分がそこに載っていないとしても、参加しているからすごく熱心に読むんです。賞をしていると、百何個か出てきた大量の連作をガーッと読むわけですが、関与していない連作は何一つとしてないんです。載っていない他の色々な作品も影響して受賞作品や賞として残るものにつながっているんだ、というのはすごく伝えたいです。

ほしみゆえさんの受賞作も、ひらがなを多用して漢字をちょっとずつ出すような短歌ですが、それは百何個の中に表記的なところで類似した作品がなかったんですね。もし類似した作品があれば、たぶん受賞はなかったような気もするし、そういう目に見えていないところで色々なことが起こっているんです。全部の作品は紹介できないんですけど、選考委員の中でそういう影響は必ず起きているので、載らなかったから何もないというのではない、ということをお伝えおきたいです。毎月歌壇もそうですが、似た作品があれば比較するので、裏で歌が相対的に動いているというのがあるんです。

【光森】

相対的に読みだとか結果だとかが変わってくるのは、最初の磁場的な意味での場につながる感じがしますね。同じような連作があれば、どちらもいいとしても、賞という場においては、どちらかあるいは両方を落とすように動いてしまう、というところは場につながっていくという気がしました。

あと、投稿されている方や、インターネットなどで歌をよく発表されている方、はたしかに石井僚一短歌賞がどういうもので、それはいわゆる総合誌の賞とはどう違うのか、ということも嗅覚的にすぐ感知して、楽しむという意味で応募しているんでしょうね。私が最近、面白いと思った話は、ある方が歌集を出された時に、総合誌で書評に載ることよりも、安福望さんに絵にしてもらえるかどうかというのが気になる、とおっしゃっていたことで、私としてはすごく腑に落ちたんですね。私自身も歌集を出しますので、その時に書評にどう載るのかなと思ったりします。書評にしても色々な取り上げられ方にしてもありがたいのですが、でもやっぱり私も安福さんのあの本に、なんで私の歌がないのかなとか、いつ絵にしてくれるのかなとか、気になったりするわけです。それは安福さんが取り上げられている絵と組み合わせる短歌が、単にインターネットで見られる歌だからじゃなくて、こんなところから歌を見つけてきはったんやというところがあるからで、じゃあ、そこになぜ私の歌がないんやろう、と気になったりするんですね。そういった意味では、昔の塚本邦雄に歌を評価されるかどうか、がかなり大きかったというところが、今は安福さんがそうなっていると思う人がいてもおかしくないのかな、というのが最近の、全員じゃないにしても、歌や歌集を出す方が思う一つの特徴かな、と思っはいるんです。

【萩原】

すごい話ですね。でも、安福さんに絵を描いていただけると、とても快いというか心地よいというか、いい気分になるので、もちろん間違いないんですが、ただ、絵が上手いとか、絵がかわいいとか、自分が選んでもらえたとか、単純にそういうことではないんですね。あ、この人、読んだんだ、というのが何か分かるんですね。

「うたらば」を比較するとまずいかもかもしれませんが、田中さんはさっき、写真が補助と言っていましたよね。分かるとか分からないとかの問題で、要するに写真で短歌を解く、という感覚があったと思います。それはもちろん田中さんのメディアの性質上そうなるんですが、安福さんの絵は全然、だれかに分からせようとしていないんですね。分かりやすく描こうと思ったら、絶対そうはならないという角度から来るので、ああこの人はこの道筋で読んだ、読もうとしているんだ、という読者の存在感というか、自分の作品に他者の手が触れてきた、と感ぜられるところがあるんじゃないでしょうかね。絵解きとして上手とは絶対に思わないですよ。そういうことではなくて、読者の存在がはっきりするところがあって、そういう意味で好まれるというのは分かります。それは塚本邦雄を比較するのももしかしたら当たっているかもしれないですね。塚本邦雄も、著作を読んでいる

人は分かると思いますが、とにかく選ぶということがめちゃくちゃ上手いんですよ。それはもう他の同世代や後の世代と比較しても、まったく比べられるような人はいないと思います。ただ、解釈するというのが、できていないのか、やりたくないのか分からないですが、鑑賞や解釈を読んでも全然分からないんですよ。ものすごいギャップだと思います。選歌のすごさと、解説の大事なところを迂回しているようなものの書き方と。どうして塚本邦雄の本は、こんなにいい歌がいっぱいあるのは分かるんだけど、その歌についての情報をくれないんだろう、というのはずっと思っていたんですよ。でも、塚本邦雄もそれを読んで選んだというのはその歌を瞬間に分かるというか、そんな角度から何かが見分かるのか、というものをいつも見せてくれていたんで、選ばれるときぞ気持ちいいだろうなと思いつつ、見ていました。やっぱり選ばれるということが、その時はものすごく大事だったので、安福さんもそれは本当にあるんじゃないでしょうか。

おそらく、そういう場所は他にもあるだろうし、石井さんの短歌賞をそういうものと感じている人もいるんだろうと思います。だれかが、ある一所懸命さでその作品に触れていく、ということ自体が業界のような場所に行ってしまうと見えないので、それは切実に求められていることなのかもしれないですね。

90年代の終わり頃から短歌朗読が、あることをきっかけに一遍に広がっていったんですが、朗読することになぜ惹かれるかという、一番はみなさんの顔が見えるからです。今、ここで私が作品を読み上げたら、みなさんがどういう反応をするかというのが分かるわけです。結社誌とか同人誌とか、何かを出してフィードバックがあるまでのタイムラグがありますよね。印刷メディアが持っているタイムラグに比べて、朗読はその場で何か伝わってくるわけですよ。マイクは通していますが、自分の発した声がみなさんの鼓膜を震わせていて、それは大げさなことでもなんでもないんです。その時の反応はやっぱりすぐにその場から返ってくるわけです。そういう読者の存在、広く言えば「場」ということになりませんが、反響しやすい場であるというのは大きいと思います。朗読が広まったのも、ネットという媒体が印刷メディア以上に好まれる面があるのもそうでしょうし、単純に業界の中で評価されていくのではなくて、この人は本気で読んでくれた、あるいは本気で反応してくれた、というのを求めているのかなという気がします。

【石井】

それですね。僕が激推ししているのが歌会という方法なんですね。現場に人がいて、作者も読者もいて、その場ですぐ返答して、この歌がどうだ、ここがいい、ここが悪い、ということを出してすぐに返してくれるのが非常にいい。僕もたまに総合誌に載せてもらうことはありますが、全然反応がなくて。やっぱり読者が見えないと、自分が何をやっているのか手応えがないので、歌会はその場で消費されてしまうものではありますが、そこに確実に人がいて、確実に自分の歌を読んでくれる人がいて、確実に他者に自分の読みを伝えられるわけです。ネットほど大きくはできないけども、その場でそれをちゃんと

できるというのは歌会のめちゃくちゃいいところなので、歌会に参加したことのない方は、いつかどこかで参加してほしいです。

【田中】

石井さん、すごく歌会推しますね。読者との距離というところで、ツイッターができてすぐの頃は、ツイッター上で短歌を詠んでふぁぼられたかどうかというところで一喜一憂していた時代があったんですよね。でも最近は、ツイッターで短歌を出しているのは **bot** が多くて、自分の作品を流す人がちょっと減ってきた印象があります。それは、ふぁぼられたかどうかよりも、読んだ人のどんな風に思ったかという声までを、ちゃんと掬い取りたいという作り手側の思いがあるからなんじゃないかと思います。すぐにふぁぼが貰えるのは楽しいんですが、何か物足りないところがあって、簡単に発表するのはやめていってるんじゃないかなというのは思っています。

逆に総合誌で出したらおそらく読んでもらえていると思います。読んでいる読者がネットをやっていないので、感想とかが届く方法が、どうしてもお手紙になってしまって、時間がかかるというのはあるかもしれませんが。もしかしたら、一読者から「あの作品読みました。」という葉書が一枚届いたら、めちゃくちゃ嬉しいかもしれません。

【石井】

お手紙届いていないので、お待ちしております。

【田中】

歌集を出して嬉しかったのはそれです。謹呈した方からすごく丁寧な葉書が届いて、それが嬉しかったりするんですね。読者の反応が単なる好き嫌いだけでなく、もう一步踏み込んだ感想や批評というレベルの打ち返しが欲しいと、ネットで短歌をしている人でさえ、感じ始めているんじゃないかというのはちょっと思っています。今後どうなっていくのかは分からないですが、昔、ブログで短歌をしていた時代があって、ツイッターに流れて、またちょっと最近、ツイッターから離れて長文を書けるメディアで短歌を発表する人が増えてきている、ということを考えると、それに対しての感想を長文でやりとりするようになるというところは、ネット上で復活してくるんじゃないか、と思います。

【荻原】

ツイッターで作品をふぁぼられると素直に嬉しいけど、慣性的になってしまって面白くない、ということなんですかね。年末に難しい題を出してもらったら短歌を書きますよ、というのをしていたら、評判良かったんで、めっちゃご機嫌だったんですよ。人間ってそういうもんだろうなと自分でも思うんですね。別に感想を直接書いてもらうのでなくても。

少なくとも読んだんだろうな、どこかは分からないけどどこかが面白かったんだろうな、というふぁぼの反応が楽しかったです。ものすごく話題になって、大勢の人に読まれたとかもありますけど、そこまでいくと嘘くさい反応、要するに話題性があるからどんどん人に伝えていって、ということはあるように思えます。でも、ぷちっとふぁぼったのは、自分がメモして読み直したいとか、そういう感覚が何もなかったらしないと思うので、これはいい反応だなと思いながらものすごく機嫌がよくなるんですね。もちろん、歌会も分かりますけどね。ただ、石井さんが歌会推しと言うけれど、歌会って推すものでなくて…

【石井】

荻原さんの場合は、どういう感じなんですか？

【荻原】

常に周りにあるものかなという気がしていたので、歌会推しというのは新鮮ですね。

【石井】

時代の問題があって、僕が物心のついた時にはインターネットが栄えているわけです。ツイッターとかでうじうじとみんなが独り言を呟いているわけです。で、そこ経由で歌会に行くんですよ。元々、現場に歌会があって、インターネットができてどうこう、ではなくて、ツイッターが先があって、ツイッターで歌会を知って、短歌の現場に出てきて人と会う、そういう流れができています。そこの捉え方が年代でずれるのかなと思います。

【荻原】

そうですね。初めに歌会を知っていると、便利なツールがあるからといってメール歌会というメーリングリスト形式の歌会が一時期、歌人の間で広がりました。でも、結局顔合わせない、情報量が少なすぎて、文字情報だけでやりとりしようと思ったら異常な量になるわけで。それで限界があるので、ある程度のところで端折って伝えるとですね、誉めたつもりが作者はカチンときて、殺伐とした雰囲気になったとか、そういうことがよくありましたし、今もやっぱりメールだと起き得るんじゃないですかね。そうになると、やっぱり元々の対面のスタイルが一番いいのかなという意見は出てきているとは思いますが、最初にネットがあって、というのは特殊なことではなくて世代的なものでしょうか？

【石井】

特殊じゃないと思います。

【田中】

最近はそのうちの方が常識じゃないですかね。

【石井】

大学短歌会もやっぱりツイッターとかで呼びかけるんです。たぶん最初は一人か二人かは面と向かってするんですが、その上で「来ませんか？」という感じで短歌会が発生しているので、ツイッターが先だと思います。

【荻原】

学生の短歌会は本当にそういうところがあるんでしょね。1987年に全国学生短歌シンポジウムという会を名古屋で主催したことがあるんですが、今だったらものすごい人数になる気がします。当時は2、30人という少数の学生たちや、あるいは学生に近い年齢の若い層ががんばってやっているのを、上の世代の人たちが温かく見守る、という妙な空気がありました。仲間を探すのがもう全然、大変だったんですね。

今は、ツイッターで何かを呼び掛けても、みなさんものすごく反応いいですからね。何に対しても反応するということではないですが、このイベントもおそらく、多くの方がツイッター経由で来られているんじゃないかと思いますし、そういうのは確かに現代の状況なんだろうと思います。

【光森】

ありがとうございます。石井さんがインターネットからスタートして、リアルで会う歌会に向かっていくのがすごく面白いなと思いました。逆に荻原さんは、歌会だとか、実際に人と会う、そういった場がインターネットを使ってさらにどうやって広げていくかということに挑戦されたと思うんですね。

で、最初に荻原さんがおっしゃっていたことに戻りたいのですが、自分たちが既存の歌壇や総合誌に「場」がないからやってきた、ということが良くも悪くも歌壇に吸収されていくというところがあったと思います。そうすると、荻原さんが実際に世に送った斉藤斎藤さんや、歌葉や「短歌ヴァーサス」の世代の人たちがいわゆる総合誌で大活躍していく、というところでは「短歌ヴァーサス」の役目は一旦、終わったのかなと思います。じゃあその先、荻原さんは何をしていくのか、もうしなくていいのか、という話があると思うんですね。

石井さんは、実際に学生短歌会はまだ色々なイベント等に引っ張りだこになっていて、既存の総合誌だとかに、もう吸収されていっていますよね。じゃあ、その中で石井さんがやっていくのは、歌会という世代によっては誰しもがやってきたことで、それでいいのかという話があります。

それから、ましろさんは、グラビアなどの組み合わせは総合誌の企画でもされましたし、ずっと「うたらば」が新しくあり続けるのか、その先を目指していくのか、それとも一旦、既存の歌壇に対する影響は終えたのか、という話があります。

そのあたりを絡めまして、今後どのように新しいことをしていきたいのか、というところを順番に聞いて、まとめたいと思います。

【石井】

僕はまだ、「毎月歌壇」もはじめたばかりだし、石井僚一短歌賞というものも一度しただけなので、とりあえずこれを継続して、どういう景色が見えるくるのか、というところですね。歌会については延々とやっていきたいと思っています。参加者が違えば、雰囲気も違います。個別の人間が一人一人やって来ているので、同じことをしているわけではなくて、毎回違うことなので、やめる理由もないかな、というふうに思います。歌会についてはもっと色んな人に開いてほしいですね。僕の役割のようなところをどんどんやってくれる人がたくさんいれば、僕も躍起になってしなくてもいいので、みんなが石井僚一みたいになれば、面白い世の中になります。いや、それはちょっと恐いですね。とにかく色々なことが勃発すれば楽しいです。

【田中】

「うたらば」もそうですが、短歌の集まる場は時代とともにどんどん古くなっていきます。ネットに依存しているものは特に。どんどん新しいものが出てきて、場のそのものが古くなっていく、という懸念はあります。実際、2010年にブログパーツ短歌と名前を付けましたが、もしかしたらもう「ブログパーツって何？」という人が現れてくるんじゃないかと思っています。「ファミ通のファミって何？」という人が実際にいるのと一緒ですね。場の責任して、届けるためには場を整備しなければいけないという点で、わからない人が現れる前に何か手を打たなくてはと思っています。うたらばの公式アカウントから短歌を流せば3000人くらいフォロワーに届くのはいいんですが、発表される場としては、古くなるブログパーツではなくて、例えばアプリにして、アプリを開いたら短歌が流れてくるなど見てもらう場をもう少し読者に身近なところに持っていけないか、ということを考えていて、いまはアプリの勉強をしています。

あと、石井さんが歌会推しだとすると、僕は投稿推しです。僕の場合は「夜はぷちぷちケータイ短歌」で加藤治郎さんたちに選をされたことによって短歌の勉強をしたという経緯もあります。色々なところに短歌を投稿して、新聞でも「毎月歌壇」でも、何らかの媒体に名前が載って、読者に名前を憶えてもらえる。短歌を作る機会という意味でも、みなさん投稿先を探してやってほしいな、というふうに思っています。その際の投稿先の一つとして「うたらば」をよろしくお願いします。

【萩原】

そうですね。歌会にしても、投稿にしても、自分が参加なり継続なりすることで、とても気分よく居続けられるようなものとして挙げてらっしゃるんだろうと思います。昔から言われていることで、事実そうなんです、短歌は継続していくのが非常に難しい面があるんですね。とにかく普通の日本語じゃないので書きづらい。書いたところで人がすぐに誉めてくれるわけじゃないし、なかなか上手くならないし、大変なことが多いジャンルです。その中で、何らかの形で一カ月に一回くらい、自分が気分よくなれるような場所を見つけしていくスタンスが、本当に大事なんじゃないかなと思います。

「場」が持っている大事な要素の一つだと思います。僕も歌会やその他の会に関わっている人たちに、「自分のペースで参加してくださいね」ということをよく言います。「この会はずごくいいから毎回来てね」とは言わないです。もちろん自分はいいと思う場所を全力で作ろうとはしていますが、その人に合うかどうかは全然別の話で、その人のペースを崩すくらいなら来ない方がいいと思います。自分がその人に来てほしいと思っても、やっぱりペースを崩しちゃだめなんですよ。気持ちよくその場に参加できないと。

このイベントには言葉があまり良くないかもしれませんが裏方さんのような仕事をしてくださっている方もたくさんいらっしゃいますが、その人たちもたぶん何かのモチベーションがあると思うんですよ。よく聞く話で、結社の全国大会で受付をしたらその人がものすごく生き生きとした作品を書くようになった、という話があって、実際にそういうことがあるんですね。受付に限りませんが、そういう何か人が書く時のモチベーションやテンションを高くしてくれる「場」みたいなものもあります。

具体的にこれからこういうものを作っていくというよりも、今日のようなイベントであるとか、そういった「場」を自分でできる範囲で作っていく、というのは今までとはまた違うスタイルでやっていきたいと思っています。その時に必ずしもガリガリに短歌のことをやらなくてもいいかな、とは感じています。短歌の「私」について、今日東京の方で批評会をやっていますが、そういう場もちろんいんですが、みなさんがもっと軽いノリで片手にビール缶を持って聞いている「場」があっても別に構わないと思うんです。とにかく何らかの形で書き手を刺激するような「場」が今、もっとあってもいいかなとは思っています。

元々、短歌は個人の内面から発した読者の側からは見えない領域にある何かを想定していたと思うんですが、今はそれば全然違うということが表に見えていますよね。さっき題詠の話をしたんですが、題詠は本人の中には何もない状態でどこかからやってくるわけですよ。まったく作者の内面とは縁のない言葉が作者に刺激を与えて、そこから作品が生まれるということがありますよね。こういう「場」がおそらくそういった機能を誘発するものなんじゃないかと思うんですよ。みんなが集まってお酒を飲んでいても、そこでやっぱり短歌の話が着になっているんだったらいいんじゃないかなという気がします。今のところ具体化していませんが、牛さんに色々教えてもらいながら、そういう楽しい場を僕も色々

考えていきたいと思っています。

【光森】

ありがとうございます。私は今日、沖縄から来て、石井さんは北海道から、萩原さんは愛知、田中さんは大阪ですので、短歌が色々なところに広がっていて、決して東京中心ではないところで集まってこういう話のできたのはすごく楽しかったと思っています。

沖縄という文脈から話すと、沖縄からこちらのことを何と言うかをいつも迷うんです。よく言われるのは「内地」ですが、通じないことが多いので「本土」という言い方をよくしたりします。それぞれにニュアンスがあって好みも違いますが、私は「本土」という言葉はすごく嫌だと思っています。本土の「本」は英語では *main* だと思うんですね。そうすると周辺のものは *sub* に当たります。言葉的には *main* は *sub* がなくても生きていける存在のような気がしているんです。私はどちらかと言えば「内地」という言葉が好きです。「内地」に対しての外側は「外地」に当たります。内地と外地ではどちらが優位というのではないと思っています。外地は日本という単位で見ると周辺ですが、世界という単位で見ると他所の内地から見た時の入り口だったりするんですね。

綿密に定義はしていませんが、いわゆる既存の歌壇があって、それに対して新しいことをやっていくということが *main* ではない *sub* という扱いではなくて、内側と外側という存在で、外側である新しい企画やイベントの「場」がさらに外から新しい人を内地に連れていくような、それぞれがお互いに影響し引っ張り合いながら短歌という世界が分厚くなったり広がったりしていくことがとてもいいことだと思っています。

今日は「アウト！」とかも言いましたが、あくまでも司会という立場なので、自分自身も新しいことをやっていくべきなのかなと思いました。参加させていただいて、そこが一番勉強になって非常にありがたいと思ったところです。本日はまだまだイベント続きますし、みなさんとこれからの新しい「場」ということについて話せればいいなと思っています。本日はどうもありがとうございます。

(文字起こし 牛隆佑)